

九州・湯布院への旅

吹田市 輪 長司

5月の連休明けに九州の湯布院温泉へ車で行った。行きは関西汽船の別府行きの高距離フェリーを利用し、帰りは1000円高速を利用するいつものルートだ。東日本大震災で復旧・復興に巨費が必要になったため、1000円高速はこの6月に廃止されるというから最後のチャンスだった。実はこの春は東北の桜の写真を撮りに行くつもりだったが、東日本大震災で行けなくなったため行き先を急遽九州へ変更した。

大阪港からの別府航路は季節外れの台風1号の影響で、出発時は土砂降りの雨だった。航海中揺れを覚悟したが予想に反し全く揺れを感じなかった。早朝に別府港に着いたとき濃霧で小雨模様だった。これでは全く観光ができない。でもほかに行くところもないため仕方なく由布院へ向けて出発した。九州へは何度も行っているが、湯布院温泉を訪れるのは今回が初めてだった。

1. 魅力が五拍子揃った稀有な湯布院温泉

途中ロープウェイで鶴見岳の山頂に登って、ミヤマキリシマを見ることも予定していたが、山頂は霧に包まれているため諦めた。午前9時には雨の由布院に着いてしまった。

宿のチェックインは午後3時だから、それまでどのようにして時間を潰そうかと悩んだ。取りあえず道の駅に立ち寄り、美人のガイド女性に由布院の地図をもらって案内してもらった。そのうち雨が小降りになったので、由布院温泉街の端にある「金鱗湖」へ行った。金鱗湖は周囲を緑に包まれた小さな池のような湖だ。湖畔には美術館を併設した洒落たカフェがある。湖の周辺一帯は静かな散策路になっている。この散策路を散策した。この湖の水は極めて透明で美しく魚が泳いでいるのが見える。紅い毛氈の人力車も走っている。ここは京都嵯峨野の雰囲気にとっくりだ。



《湯布院の金鱗湖》

それから街外れの高台にある有名な蕎麦屋へ行った。ここには土砂降りの雨の中を次々とタクシーで乗り付けてくる客がいる。この蕎麦は真っ白な蕎麦で、腰があってなかなか美味かった。老齢で端正な顔の蕎麦屋の主に、雨で時間を潰しかねていると話すと、由布岳を一周する一般の観光客が訪れないドライブコースを教えてくれた。このコースを車で走ったが、由布岳の頂上はあいにく雲がかかって見えなかった。

由布岳を一周したあと温泉街の中心にある、観光客向けの商店街「湯の坪通り」を歩いた。この通りにはしっとりした和風構えの洒落たお店が並んでいて観光客を楽しませてくれる。この奥に金鱗湖があるのだが、あちこちに小さな美術館もある。洒落たカフェを併設しているところも多い。全体の雰囲気は和風のしっとり感で統一されていて、芸術の街の趣をかもしだしている。



《湯布院の湯の坪通り》

天候が優れないから旅館のチェックイン時刻と同時に宿へ入った。眼下に湯布院の街を挟んで正面に由布岳が迫る絶景の場所にある宿だ。開業 10 年の新しい旅館で、和洋室を頼んでおいたがこの部屋がなかなか良かった。建物は和風の二階建て、客室は和室と洋室の二間続き、障子をあしらった和風の洋室に和風のベッドが備わっていた。和室のほうも手抜きはなく、床の間には本物の骨董軸が掛けられていた。最新式の大型薄型テレビも備わっている。この部屋の造りは今後の和風旅館の設備を示唆している。

泊まった宿のオーナーは絵画好き、骨董好きだそうで、オーナー目利きの洋画がレストランの壁にずらりと展示されていた。それぞれの作品には解説プレートが張られ、日展会員の作品もいくつかあった。それらをじっくり見ていると、宿の人が特別に二階の部屋へ案内してくれた。そこには日本画、陶器、骨董家具が所狭しとびっしりと展示されていた。

朝丘雪路の父親が描いた日本画の美人画もあった。描画の線が極めて美しい。珍しいところでは、美

智子皇后の実家の先祖が使っていた「正田醤油店」の看板もあった。この木製の看板は「お宝拝見」の審査員役が泊まった折に尋ねてみたら 10 万円と値付けられたそうだ。

この旅館は旅館か美術館か判らないような趣のインテリアだった。

ここ湯布院には凝った造りの和風旅館が多い。平屋か二階建てのこじんまりした数奇屋作りで、何棟かの離れもあるところが多い。樹木で隔たった離れにはすべて専用の温泉が設けられている。旅館同士も樹木で隔たっているためしっとりした雰囲気があり何より静かだ。隠れ宿の趣が濃厚に醸し出されている。また新しい旅館も次々と建設されている。



《湯布院の温泉宿の庭園》

宿の料理はどれをとっても美味かった。金鱗湖畔のカフェのコーヒーやケーキ類も美味かったし、蕎麦屋の真っ白な蕎麦も美味かった。これはひとえに水が美味いからだろう。由布岳の裾野の自然の恵みだ。水のまずい大阪人にはこれだけでも訪れる値打ちがある。

泊まった宿の温泉の泉質は、無色透明、無味無臭の単純温泉と無色透明の炭酸水素泉の 2 種類があった。それぞれの湯温は高く湯量も豊富で、加温加水なしの贅沢な源泉かけ流しだった。大きな岩をあしらった露天風呂は絶景の風景に溶け込み、雄大な由布岳を眺めながら名湯に浸る至福のひと時を味わった。



《湯布院温泉宿からの雄大な由布岳の眺望》

湯布院には「阿蘇くじゅう国立公園」を構成する美しい由布岳がすぐそばにそびえている。由布岳は標高 1583m で豊後富士とも呼ばれ、二つの頂を持つ極めて優美な山だ。山裾は草原になっており、そのそばを由布院へ通じる九州横断道路から由布岳の雄大な眺めが堪能できる。さらに温泉宿の部屋や露天風呂からも、雄大な由布岳が眺められるところが多い。

以上のように、湯布院温泉は、雄大な風景、凝った造りの旅館、京都嵯峨野風の温泉街、美味しい料理と水、文句なしの泉質と、見事に五拍子揃っている稀有な温泉地だ。湯布院は九州のみならず西日本でも、現在一番人気の温泉地だといっても過言ではないだろう。今回訪れてみてその人気の秘密がよく分かった。

2. 大型バスが入れず団体客が泊まらない温泉地

しかしながら湯布院の温泉旅館にはひとつ大きな特長がある。それは多くの旅館が大人数の団体客を相手にしていない、というか相手にしたくてもできない。旅館が立地する中心部の道幅はどこも狭く、乗用車 1 台がやっと通れる程度で大型バスはまったく入れない。従って宿の駐車場も大型バスは停まらない。また旅館には大きな宴会部屋もない。料理はバイキングではなく会席料理のみだ。当然のことながら宿泊可能人数も限られている。最初から少人数の個人客相手に造られている。

しかし湯布院温泉が最初からそのような個人客を狙って開業されたとはとても思えない。中心部にある老舗旅館は、大正時代や昭和 20 年代からあるが、たまたま田舎の温泉地で道幅が狭く拡張されないままだったため、当時隆盛だった企業の団体客を受け入れることができなかったのだろう。それが時代が変化し、しっとり感を求める個人客が増えたため、その需要に合わせたものと思われる。今をときめく湯布院温泉は、たまたま今の時代にマッチしたのだ。宿の主人たちがこの 20 年間時代に合わせるために

やったことは、宿の広い敷地に客室の建て増しをせず、せっせと樹木を植え続けてきたのだそうだ。その結果、静かでしっとりした京都の嵯峨野風の旅館街になったようだ。

3.外国人観光客を視野に入れた新しい和風旅館街

日本は国の大きな政策で外人観光客を積極的に迎え入れようとしている。美しい春夏秋冬の自然景観と数多くの温泉を生かし、美味しい日本食を提供し、日本人特有のきめ細かなもてなし心を発揮すれば、必ずや外人観光客の満足感が得られるだろう。

しかしひとつだけ外国人に評判の悪い部分があった。それは観光地の温泉旅館の構造と設備だった。日本の観光地の温泉旅館は、昔ながらの純和風か西洋風のホテル形式のどちらかだ。これが外国人観光客にすこぶる評判が悪いとされている。多くの外国人にとっては、和室で食事を採り、そこで寝るのは苦痛以外の何ものでもない。一方西洋をデッドコピーしたホテル形式では、日本に遊びに来ている趣が味わえない。従って外国人の生活習慣を取り入れながら、しっとりした日本らしさを演出する和風建築が求められている。

その答えの一つが今回利用した宿の設備形態だと思われる。建物は二階建てまでの和風建築、客室は和洋室すなわち和室+ベッドを設けた和風洋室、食事は椅子席個室かレストランでの会席料理、温泉は大浴場のほかに部屋付き温泉か貸切温泉、これらの設備条件をすべて揃える必要がある。また和風の「離れ」は西洋ではコテージに相当する。従って離れは高級和風旅館には不可欠な設備だろう。但しこれにもベッドを設ける必要がある。

外国人観光客だけでなく日本人も足が弱いお年寄りが増えている。このため日常生活もベッド、椅子の生活スタイルが増えてきた。また若い人も同様のスタイルになっている。従って今後の観光旅館の客室は、和風洋室や和洋室が標準になっていくだろう。

九州はアジアに近く現時点でも韓国や中国、台湾から、多くの団体客を受け入れている。しかし団体旅行を嫌う富裕層も増えていることから、それらの層を狙った高級和風旅館は、今後確実にアジアの富裕層に注目され利用者が増えていくだろう。 ☆☆